

「日本一の保育」に思う

黒田成子

この春から私は東京郊外の武蔵野市にある小さな幼稚園の園長として勤務している。毎日子どもたちと共に生活できることは実に愉しいことである。

ところで毎朝私が通勤する道の四つかなどに若い母親達が三々五々とたむろしている姿を見かける。側には制服、制帽姿の子どもたちがかばんをさげて立っている。ああこれは多分〇〇幼稚園のマイクロ・バスを待っているのだなと気がつく。次の朝、そこを避けて裏通りを選ぶ。すると又かど、かどにバスを待つ母親と女たちの姿に驚く。しかも私の勤めるS園から百メートルも離れない所にも子どもが待っている。やがて「幼児能力開発〇〇」のサインをつけたバスが子どもたちを拾って過ぎ去って行く。

もうすぐS園だ。小さい園の狭い庭。やっと、子どもいっききした生活が感じられる園に辿りついてはっとする。O君はまた竹馬に挑戦している。やっと縄とびができるようになったS子のうれしそうな顔、大好きな水遊びやどろんこ遊

びにうちこむK夫たち。時間のたつのも忘れてじつくりと遊びにうち込む彼らである。

私共は子どもたちのためにこの園は日本一(?)の園だと自負しているが、世の親たちはそうは思わないのか、いっこうに園児が集まらない。

以上のようなケースは昨今あちら、こちらに見聞きする。殊に自発活動を大切にする園では年々応募者が減少していく現状であるときく。笛ふけど人は踊らずというところか。理由は明らかである。出生率の低下、母親たちがスポーツや教養(?)に自分たちの時間が必要な事、長時間あずけられる所を好む傾向、もちろん給食があればお弁当作りの手間がはぶける。そして何よりも早期教育への憧れとあせり等をあげることができぬ。

それならばこれらの現象には眼をとじ、来たい者だけを迎えたらい。細々なながらも、最高と思う保育をつづけていればよいという意見がある。しかしそれではあまりにも消極的

で、社会的責任を無視している。

もともと幼稚園は半径五〇〇メートル、すなわち園児の歩行距離の範囲内に一つずつあるのが望ましい。そのことが決められた頃は幼稚園とは小規模で、地域の中にあり、子どもたちが誘いあって登園できる、親しみのあるものが考えられていたわけである。

しかし近年の都市構造の変化により園児はかならずしも地域にある園に通うとは限らなくなった。又周知の通り就学率が九〇%以上になるほど幼児教育は盛んになった。一方、就学前教育は次第に小学校の予備校的要素を帯びるようになった。保育はますます子ども不在の発想のもと、営利事業化し、組織は大きくなるばかりである。遠距離、近距離を問わず園児を集めるためバスの運転も必然の事となり、むしろ大規模を誇る象徴の観さえ感じられる。

これらの現象に加え保護者の過剰な教育熱がある。小さい兵隊のように整然と行進できる子どもたちの姿、鼓笛隊や漢字教育に成果を見せるわが子に異常な期待をかける親達に子どもにとってのほんとうの幸せとは何かということをどのようにしらせる事ができるか——至難のわざという他はない。

このことについて母親の側に問題があるように考えやすいものであるが、まず園の側の意識も変えなければならぬと思う。園がすべての答えをもっていて保護者はこれを単に受け入れるものであるというような一方的な考え方では今の母親たちはついてこない。わたし達保育者は母親たちがおかれている社会の現状を知る必要がある。

父親は「社用族」として忙しく、子どもの教育は母親まかせとなり、自信喪失の母親も多い。都会生活はとかく人間関係が稀薄になり勝ちである。そうした疎外感を持ちながら家庭のあり方、子育て、学校の事等、物質的豊かさの中で何を子どもに与えてよいか悩みは果てしなくつづく。いろいろのケースがあるだろうが、私達も母親と共に考え合っていくたい。学歴社会のエスカレーターに子どもをのせて勝利したと思っても、実は健康や友情や人間性の面でいかに大きい犠牲が払われているか——。

子どもたちを真に支えるいきた充実感はどのようにして育つものかを、母親自身も主体的に考えられるよう、社会の現実を直視しながら追求していくものでありたいと考える。

(東京・武蔵野相愛幼稚園)